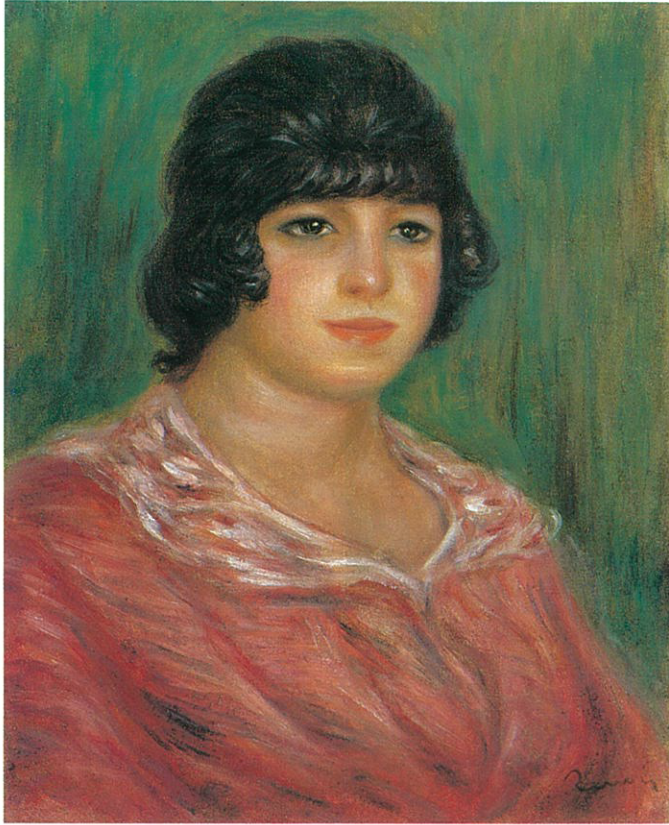


# 市立美術報だより

発行 鹿児島市立美術館 〒892 鹿児島市城山町4番36号 TEL (0992) 24-3400



ビエール=オーギュスト・ルノアール  
「バラ色の服を着た  
コロナ・ロマノの肖像」  
1912年(41.0×33.5)

館蔵品誌上ギャラリー②

ルノアールは1841年中部フランスのリモージュに生まれた。この町は陶業で知られ、リモージュ焼として、その名を世界に知られている。しかし、ルノアール家はこのような伝統産業とは縁がなく、つましい仕立屋であった。彼が4歳の時に一家でパリに出て、小学校を終えた13歳の時から、陶器工場の絵付けの見習いとして働いた。後年、この職人仕事が画家ルノアールを支える芸術の根底になったといわれている。

ルノアールは生涯を通じて、人物にモチーフを求め、人物の中でも圧倒的に女性像が多い。これは女性のもつあでやかな美しさと官能の豊かさの中に、自らの芸術を打ち立てたいと願ったからであろう。

このコロナ・ロマノの肖像はルノアールが70歳を超えてからの制作であるが、この頃の彼はリューマチの激痛に苦しみ、手足の自由は奪われながらも、指に絵筆をくくりつけて制作に励んだのである。しかし、画面からはそんな壮絶な苦闘のあとは微塵も感じられな

い。むしろ、この生涯最後の10年は、ルノアール芸術が更にけんらんたる輝きを放ち、色彩はいよいよ豊かに華やかになり、トーンは縦横に響き合い、鮮麗・官能の頂点に達している感がある。

コロナ・ロマノは当時、有名な舞台女優で、彼はこの時期好んで彼女をモデルにしている。

表情は静かで穏やかながら、視線は鑑賞者と向き合うように描かれており、引きつけるような眼差しが印象的である。肖像として顔の部分など、かなり細かく描き入れながらも、それ以外の部分は溶け合うような色調である。豊満なモデルの上半身がルノアール特有のソフトなタッチで描かれており、着衣ながらも肉体のふよよさは目を見はるばかりである。コスチュームは燃えるようなバラ色で、柔らかなドレープと襟元のレースが心地よいアクセントになっている。